

伊勢物語における笑い：人物と語り手との関係

ギュモ・オリアンヌ

本発表は、『伊勢物語』の「笑い」について、物語言説の面（語り手の介入）と物語の思想的な面（みやびと反みやび）とから考察した結果を報告する。

『伊勢物語』に関する歴大な研究の蓄積に比して、その「笑い」についての研究は少ないが、いくつかの重要な指摘がある。津田左右吉は『文学に現はれたる国民思想の研究』（1916）では「かういふ風に、まじめな、または平凡なことは勿論、あはれな光景までが滑稽化せられてゐる。」と論じている。また、麻生磯次は『笑の研究—日本文学の洒落性と滑稽の発達』（1947）に「伊勢物語にも、全体の調子に滑稽味が感ぜられる。恋愛や哀傷の場面にしても、しみじみとした情感が盛られては居らず、却って滑稽的に取り扱はれてゐる場合が少なくない。」と示している。それに対して滝瀬爵克は「ある時は不調和な、時にはまた誇張した滑稽な表現を用いることで、かえって「あはれな光景」みやびにしてあわれな情趣を表出するために役立てているのであることが理解される。」（『伊勢物語私論 みやびとその文学性』1983）と論じている。

これらの研究が言うように、笑いの要素が「あはれな光景」を滑稽化するにせよ、哀れな情趣を表出するにせよ、『伊勢物語』が悲愴を伴った笑いの作品であることは否定できないだろう。

もちろん、『伊勢物語』の全ての章段の物語が滑稽的に扱われているのではないが、『古今集』にもある和歌について「さる歌のきたなげさよ」（定家本 103 段）といい、田舎女に対して「女、限りなくめでたしと思へど、さるさがなきえびす心をみては、いかがはせむは。」（同 15 段）というなど、語り手の言葉の裏には登場人物の言動を嘲笑する傾向があるかと思われる。

語り手が登場人物の言動を批評したり批判したりして直接に現れることが一つの特徴である。山本登朗は「批判や批評をしても、実はそれは、親密さに裏付けられた、どこかユーモラスな雰囲気を持ったものであったとののである。」と論じている。『伊勢物語』では語り手が、話を語るだけではなく、自分で作った人物の言動に対して評している。そのように語り手が語り手の役割を捨てて、批評者の役割を果たす。そうした観点から定家本第 40 段を検討し、『伊勢物語』にある語り手の批評と「笑い」との関係について考える。